

支払いにすら難渋するというようなことは、到底文化国家の名に値いするとはいえない。そのため、退職手当を増額し、退職手当は全額免税とすること、退職年金は俸給年額の60%に引上げ、年金額算定の基礎俸給を退職時の俸給額とすること、かつ、給与水準の改定に見合った年金のスライド制をただちに実施することなど、その改善について努力されたい。

10-5

総学庶第1626号 昭和50年11月11日

環境庁長官、国土庁長官、文部大臣、  
農林大臣、建設大臣、文化庁長官、  
林野庁長官

殿（各通）

日本学術会議会長 越智勇一

（写送付先：大蔵大臣、自治大臣、警察庁長官）

野生動物の保護について（要望）

標記のことについて、本会議第69回総会の議に基づき、下記のとおり要望します。

記

日本学術会議は、早くから我が国の自然保護に関し、度々勧告を繰り返して来た。その基本的な理念は、我が国の自然を保護し、そこに生息する生物を守ることが、健全な人間の生存にとって最も重要であると考えて来たからに他ならない。しかるに、近年急激な国土開発に伴い、自然が破壊され、生物生存の基盤が失われようとしていることは憂慮に堪えない。

例えば、ニホンザルのごとく、従来その対応が比較的安易に考えられていた野生動物が、市街地近くに現われる機会が多いため、全体数が増加しているかのような錯覚を生じているが、実はその数はむしろ激減しつつあり、あるいは遠からずして絶滅のおそれさえあることが指摘される。

更に数年前から問題となっていたことであるが、特に今年に入って、特別天然記念物に指定されているニホンカモシカによる造林木や農作物への被害に対し、直ちにその捕獲あるいは射殺の要請が高まって来た。我々は、いやしくも一度特別天然記念物に指定されたものが安易に捕獲・射殺されるようなことがあれば、その影響するところは極めて重大であり、ニホンカモシカの実数についての正確な調査もない今日ではニホンザルの状況とも対比して、まず、その実態をは握ることが緊急必要であると考えている。また、我々は元来、野生動物の保護と農民の生活の安定とは両立すべきものと考えており、政府は、これらの観点に立って正しく実態をは握しつつ、改めて特別天然記念物の取り扱いの原則を明確にし、野生動物の保護の理念を確立し「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」等についても再検討することを要望する。

差し当たり、政府は、これら野生動物の問題の処置について、少なくとも早急な捕獲あるいは射殺の許可を与えるべきではなく、緊急対策としては、ニホンザル以外の野生動物の被害防止に有効である防護柵の建設に対する援助及び農作物等の被害補償等を行うことによって農民の受ける被害を可及的に少なくすることに努めると同時に、これと並行して、これら野生動物について、その分布状態、社会機構等基本的な調査を実施し、例えば保護地域の設定についても、必要とあれば格段に広範な自然保護地区の設定をも考慮すべきである。

なお、上記のごとき諸問題の生じた根本の原因は、我が国の自然を守る観点を忘れた乱開発、森林管理等に基づくものであることを反省し、各種野生動物環境の保全を目指す安定した生態系を保つために、必要な回復の措置をとるべきであり、そのためにも、長期的観点にたった我が国全土の広範な調査が必要であることをここに指摘するものである。

10-6

総学庶第1623号 昭和50年12月18日

内閣総理大臣 三木武夫 殿

日本学術会議会長 越智勇一

( 写送付先：科学技術庁長官，大蔵大臣，文部大臣，  
厚生大臣，通商産業大臣，労働大臣 )

生体工学基礎研究所（仮称）の設立について（勸告）

標記のことについて、本会議第69回総会の議に基づき、下記のとおり勸告します。

#### 記

物理学を基礎として発展してきた現代の科学技術は、きわめて整然と体系づけられ、今後も発展するものと思われるが、年を追って生体を対象とする科学へと拡大する傾向が増大しつつあり、最近の工学各部門の発展をみても、やはり共通のかつ極めて顕著な趨勢として生体工学の進歩がある。生体工学は元来電子工学と医学との境界に発生した医用電子工学を基軸として発展した学術である。医用電子工学の成果が生体計測、生体への作用などに反映され、生体に対する工学的な理論、手法が具体化されていくに及んで、いまや広く工学が生体を対象とする方向に飛躍的な発展を旨とする時代を迎え、新しい科学技術の大きな柱を築きつつある。

生体工学はこの発展過程において、歴史的には一応独立な発展をしたとみなされるいくつかの分野をも包括するようになったのである。たとえば人工義肢や人工臓器を取扱う生体機能代行工学、生体の機能を系統的観点でとらえる生体システム工学、生体内の情報処理に着目した生体情報工学などが挙げられる。そしてバイオニクス、サイバネティクス、人間工学、人工知能学、教育工学、診療システム工学、環境工学その他の学術と深い関連を保ちながら展開されつつある。

したがって将来の展望のもとに生体工学の基盤を確立し、飛躍的な発展を促すためには、包括的かつ統一的な観点から、この領域を再編成することが急務であり、これにより工学関連諸分野の密接な協同融和が行われ、かつ工学以外の学術への影響力も増大し、特に基礎医学及び臨床医学との協調による直接的な人類福祉の増進にも繋がるものである。

生体工学領域における最近の課題の若干をあげるならば、長い生物の歴史の試練を経て作りあげられた生体システムは、考えられる最高のシステムとして工学の恰好の対象であり、より高度の人工システムを設計するための貴重な示唆は、これから求めてゆかなければならないと考えられる。

また一方、最近の技術の急激な発展は、元来人間のためのものである筈の技術が、かえって人間を害する面もあることが明らかになっており、今後は人間との関係を多面的に考慮しない技術は成立不可能になるであろう。それにも拘らず、技術の結果が人類に及ぼす影響を科学的かつ体系的に研究する学術は未確立の状態である。今後は人間自身を対象とするさまざまな技術の開発が予想さ